

L.A.カーケンダールの性教育思想の研究

鹿 間 久 美 子

Abstract

The purpose of this study is to examine the sexuality education that Lester Allen Kirkendall has indicated. Kirkendall was a pioneer of the sexuality education. He often provided informal counseling to his pupils, especially to youth with sexual concerns. He composed that experience into some books such as "Sex Education as Human Relations" (1950), "Premarital Intercourse and Interpersonal Relationships" (1961), and it also led him to a genuine innovator in the field of Sexuality Education. Because of his outstanding contributions to that field, he was a one founder of SIECUS and served as a board of directors.

This study produces the following result; Human sexuality as a concept definition, and so in order to construct an appropriate framework for the consideration of sexuality, basic concepts referring based on Kirkendall's sexuality and sexuality in WHO/WAS.

キーワード.....L.A.カーケンダール 性教育思想 セクシュアリティ

1 はじめに

1-1 研究の目的

学校教育における性教育の意義としては、教育基本法第1条(教育の目的)が求める、「人格の完成」を具体的に現実化することにある¹⁾。

現在、学校において性教育の言説は、多種多様に発表されている。性教育については、第二次世界大戦後、多くの人々によって検討がされてきた。例えば、性教育を学校教育において普及させる取り組みの1つに、1972年「財団法人 日本性教育協会」の設立があげられる²⁾。

「日本性教育協会」は、欧米をはじめ世界各国の諸団体、学会と連携する、文部大臣認可の団体として発足している。設立の中心となった朝山新一³⁾は、1979年 WAS (World Association for Sexology:世界性科学会議) から国際性科学賞を授与されている。この賞は、国際的な性科学者に与えられる賞である。同様に1979年の受賞者は、キンゼイ (Kinsey, Alfred C.) やマス

ター（Masters, William H.）& ジョンソン（Johnson, Virginia E.）そして、L.A.カーケンダール（Kirkendall, Lester A.）であった。

カーケンダールは、我が国を3回訪れている。いずれも、日本性教育協会にとって重要な時期に訪れている。第1回目は、1971年の創設直前、朝山ら同協会のメンバーと懇談をしている。第2回目の1980年は、10周年記念特別講演のために来訪し、「日本性教育協会は私にとって単なる外国の団体ではなく、私が一生を打込んできた仕事を日本において引き受けてくれている、いわば私のパートナーなのだと考えたのです⁴⁾と述べている。また、第3回目の1985年では、15周年記念特別講演で、「私はその草創期から、JASE（日本性教育協会）を支援してきたように感じるわけであるが、それだけにその15年を祝い、さらに今後の発展を祈るものである⁵⁾とあいさつを述べている。カーケンダールは、我が国における性教育の思想に、強く影響を与えた人物の1人である。

現在、学校における性教育の言説が、多種多様に発表されているため、性教育について意義や方向性を検討する場合、「性」とは何か、「性教育」とは何か、などの用語の解釈を示す必要がある。

私は、新潟大学現代社会文化研究科紀要32号で、カルデロン（Calderone, Mary S.）とカーケンダールの「性の概念」を引用し、図式化を試みた⁶⁾。その後、教育学的研究手法に基礎を置く、カーケンダールの性教育論に注目し、カーケンダールの「セクシュアリティ」概念に関心を持ってきた。

本論文では、性教育の研究者としての、カーケンダールの履歴をたどる。次に、「性」とは何かという用語の解釈を基に、「セクシュアリティ」概念を構成する下位概念（セックス・ジェンダー）との関係性から、カーケンダールのセクシュアリティに関する理論を検討する。

1-2 研究方法

我が国において、キンゼイやマスター&ジョンソンに比べるとカーケンダールの知名度は非常に低い。現在インターネットで「L.A.カーケンダール」と検索しても、6件の表示という結果である⁷⁾。内容は、1972年東京学芸大学の紀要として波多野義郎らの論文⁸⁾が1件だけである。その他は、性・ジェンダー・セクシュアリティを論ずるために、「カーケンダールのセクシュアリティ」概念として、1~2行の引用がされているなど、資料となる論文はわずかである。

同様に、カーケンダールの著書が訳出されたものは、1975年に『愛の理解 家族関係の性教育』⁹⁾の1件である。その他の文献は、来日時の講演用に示された論文である。前述の著書や論文は、いずれも波多野が中心となって翻訳に当たっている。

一方、カーケンダールの経歴に関しても、波多野らの論文の中に簡略に示されているだけである。そこで、第1に『愛の理解 家族関係の性教育』解題、「L.A.カーケンダールの性

教育論」¹⁰⁾、「人間の性 = 過去・現在・未来」¹¹⁾などを基に、業績や主な研究活動をたどる。また、1985 年以降は、我が国での論文が確認できなかったため、「Human Sexuality : An Encyclopedia」¹²⁾による KIRKENDALL, LESTER と「A. Historic Humanist Series」¹³⁾による Lester Allen Kirkendall などで補足する。さらに、当時の社会的事象などの影響を加えて、カーケンダールの履歴を作成する。

第 2 に、カーケンダールの「現代社会における性の役割」¹⁴⁾という論文を基に、「性」とは何かについて論証し、カーケンダールの性教育思想を貫く、「セクシュアリティ」の概念について明らかにする。

2 カーケンダールの履歴

履歴は、1 - 2 研究方法で示した文献により作成した。社会的事象については「戦後日本の性教育史と財団法人日本性教育協会 30 年史」¹⁵⁾と「女性のデータブック第 3 版」¹⁶⁾を参考にした。なお、日本における社会事象については、網掛けで示した。

表 1 カーケンダールの履歴（筆者作成）

年代	業績	主な著書・論文・研究活動など	社会的事象
1903	米カンザス州オーバーリン市小麦・牧場農家に出生		ライト兄弟飛行成功 家父長制（父権社会）
1924	カンサス州立大学入学	農業発展のために設立された国立大学	荻野学説発表
1928	同大学卒業	オーバーリン市小学校教員	
1929	ニューヨークのロンビア大学大学院入学（M.A.）	米教育学発展の中心的大学院、（1916 年米で初めて『性教育』のタイトルのついたパブリック・スクール向けの教科書の著者、ロンビア大学附属ティチャーズ・カレッジの生物学教授、M.A. ビゲロウに師事）	社会システムの変化が著しい（母権社会）
1931	修士課程修了、博士課程へ		自動車の流行 都市化に伴う家族関係の変化が著しい
1933		カンサス市・オーバーリン市の中・高等学校教員及び校長	
1934		「倫理教育と性格形成」	
1935	博士課程修了、博士論文 コネチカット州立教育大学 準教授（教育学）	（論題）「高校生における学校生活への 適応の変化に関する要因」 （骨子）青少年の指導は、教育の内容によって 枠を与えていくやり方よりも、彼らの置かれて いる環境という要因に目を向け、その中で自分 なりに行動基準を作っていくようにし向ける のが教育者の役割である。 「社会奉仕 生徒の職業指導に当たって」	米教育学では経験主義教育が隆盛の一途をたどっていた

レスターA.カーケンダールの性教育思想の研究（鹿間）

1937		「平和主義者の思想形成の過程」 「生徒の学級活動を疎外する要因について」	
1938		「児童の動機づけに関する研究」	
1939		「人口及びその流動性増加がもたらす教育の影響」	
1940		「青少年における性への適応」	
1941	オクラホマ大学教育学部教授（ガイダンス）	全米ヒューマニスト協会創立時より参加	「性」という単語が付いているだけで批判を浴びる社会状況（親が性教育の専門家と言うだけで息子がいじめにあう） 第2次世界大戦突入
1942	性教育をライフワークとして本格的に取り組む（ガイダンスの実践の中で必要に迫られた）	「性の問題に関する個別カウンセリングの方法」・・・問題解決学習をガイダンスの場面で応用した	
1943	戦時軍属として連邦政府に奉職（教育顧問）	「性教育における直接話法」 本格的な性教育の研究に着手（面接調査の開始 1950年人間関係と性教育出版へ）	
1944		「体育教師と性教育」 「教育における健康・性・人間関係」	
1945	陸軍カウンセラー	欧州派遣	終戦
1946	家庭生活協議会主事、性問題カウンセリング没入	家族関係改善運動 「離婚は問題解決にならない」	日本国憲法発布
1948	イリノイ大学 YMCA 専任講師	「青少年の性問題」	キンゼイ報告（性行動科学者の代名詞） 世界人権宣言採択
1949	オレゴン州立大学家政学部教授（家族関係学） カンサス大学医学部客員教授	世界各国から受講のため訪米した留学生を対象に性教育の指導者として養成（日本から松島千代野受講） 性教育の理論体系の基礎を築く 「高校における結婚・家庭生活教育のあり方」	朝山「現代学生の性行動」発刊 文部省新学習指導要領に生徒の自律活動促進とガイダンス重視（米 CIE の助言を得て導入を図ったが米ではカウンセラー制度が基礎であったため我が国では具体化しなかった）
1950	（性教育論のベースと評される著書の出版）	「人間関係としての性教育」 （17～32歳までの530名の男子を直接面接し、対象者個々の性についての考え方を根底まで分析し、性教育のあり方を論じた。 各個人の性教育の背景が後の性生活にどんな影響を与えたかを探った、教育的色彩の強い、科学的方法論として彼の性教育論の基礎となっている）	朝鮮戦争勃発 1951年児童憲章制定 1952年GHQ廃止占領解除、道徳教育の振興、特別活動の普及 1955～1960年は、純潔教育関連事象多い
1956		「大学生のための性教育」	
1957		「性の不安に関する教育への論評」	

1961	(自説を裏付ける金字塔と評される著書の出版) 家族関係学者であるキャノンによればこの研究を「60年代の性科学の幕開け」にふさわしい快挙と評価されている	「婚前性交と対人相互関係」 (大学生男子 200 名を対象に個々の性倫理と性行動の関係を調査分析し、婚前性交の是非に関する倫理基準を確立した。結果は性行動そのものよりもその背景にある対人関係、つまり人格的ふれあいの関係性の質を重視する必要があるという結果を示し、性教育論の中心概念となった)	米離婚率の上昇、世代間の断絶、権威主義の崩壊 産業技術の進歩による家族の変化として「遠心的家庭」という表現がされ、家族の精神構造の変化がクローズアップされる
1962		「親となることへの青少年における準備」	
1963		「大学生と性の戸惑い」	
1964	SIECUS(全米性情報教育協会)創設	SIECUS 理事としてセクシュアリティの概念確立を初め、米国性教育運動の中心的な存在となる 「性と私たちの社会」	朝山「性教育」発刊 大量消費時代 世界的な学生運動
1965		「性教育」・「性教育：再評価」	
1967		SIECUS から性教育に関する書物や啓発用パンフレット多数刊行 「性に関する決断の分析」	
1968		「思春期における性」「結婚と家族関係」	
1969	オレゴン州立大学退職 名誉教授となる	「性教育への挑戦」「性教育における教員の質疑応答」・「性教育：セクシュアリティ」 社会学的理論を応用し取り入れる	全米心理学会でセクシュアリティ議論
1970		「カーケンダールの性教育」	「国際教育年」 ウーマンリブ運動 GNP 世界第 2 位 人工妊娠中絶率増加
1971	初来日(7 週間に及ぶ滞在期間中各地を訪問) 第 18 回日本学校保健学会、早稲田・学芸大学など講演 11 回、座談会 4 回 セクシュアリティの概念化と性教育論の確立を実存的態度により実証	「近代社会における家族」22 頁の草稿 波多野は通訳の内容を「カーケンダールの性教育」として雑誌で紹介、その他「交心」「性教育を考える会」などに寄稿 日本性教育協会 1972 年設立予定準備会メンバー朝山・村松らとの懇談 「新しい性の革命」編集(総合的な人間把握とセクシュアリティの真髄とされている)	日本を近代化路線を歩む東洋の産業国という認識で講演が成された 青少年白書に初めて「性」が登場 「未婚の母」問題化 モラトリアム現象 アイデンティティの欠如
1972	新聞投書欄に「まやかしの性教育は国を滅ぼす」など性教育やカーケンダールらへの中傷増加	「現代社会における性の役割」 (SIECUS1965「性教育」の内容) 「現代社会における性教育の役割」 (1971 年来日用に構成)	波多野カーケンダール宅訪問 文部省純潔教育を「性に関する指導」として、推進を促す
1973			WHO 設立
1974	世界ヒューマニスト協会理事として総会に出席(米国代表)		我が国の性教育議論やや低調化傾向
1976		「性的な権利と責任」	日本 WHO 加盟
1979	WAS(世界セクソロジー会議)で国際性学賞受賞	キンゼイ、マスターズ&ジョンソン、朝山新一と共に受賞	青少年非行増加 国際児童年

レスターA.カーケンダールの性教育思想の研究（鹿間）

1980	2度目の来日	日本性教育協会夏期セミナーにおいて10周年記念講演（通訳）波多野セクシュアリティに関する定義と総合性さらに教育論を述べる	米の性教育はセクシュアリティの教育として確立される 厚生省10代の妊娠中絶増加傾向発表 校内暴力増加
1981			米エイズ患者報告
1982			買春ツアー禁止、旅行業法改正発表
1983	ヒューマニスト・オブ・ザ・イヤー他多数の表彰を受ける		生命に関する科学的知見の爆発的な拡大（避妊技術向上や体外受精など科学技術の著しい進展）男女の役割や職業選択の流動化、HIV 発見
1984		「2020年における結婚と家族」	
1985	3度目の来日	日本性教育協会設立15周年記念講演（ウーマンリブからマンリブ運動へ、そして人間尊重すべきヒューマンリブ運動社会におけるセクシュアリティの捉え方総合的に、健全に発達させるために）	マスコミの性情報過激化
1986			文部省「生徒指導における性に関する指導」発行
1989			「性教育元年」マスコミ不正確報道
1991	死去		

3 カーケンダールのセクシュアリティ理論

3-1 カーケンダールはなぜ性教育に関心を持ったか

ビゲロウ（Bigelow, Molis A.）は、「アメリカで、はじめて『性教育』というタイトルのついたパブリック・スクール向けの教科書の著者」として紹介されている¹⁷⁾。

カーケンダールは、このビゲロウに師事をした。しかし、カーケンダールの初期の論文では性教育が研究テーマの中心ではない。博士論文のテーマは「高校生における学校生活への適応の変化に関する要因」¹⁸⁾であり、骨子（履歴4頁参照）からは、経験主義教育の影響を強く受けた内容となっている。ではどのようなきっかけで、なぜ性教育に関心を持ったのか。

カーケンダールは、博士論文を執筆した後、コネチカット州立大学の準教授に就いている。そこでは、ガイダンスに力を注いで活動し、多くの論文を執筆している。その後37歳で、オクラホマ大学教育学部にガイダンスの教授として迎えられた。2つの大学におけるガイダンス活動から、しだいに性教育に関心を向けるようになったのである。

ガイダンス（生徒指導と訳すよりも、我が国においてはカウンセリングや、生徒の悩みに対する相談活動と捉えたほうが適切である）の分野では、学生の相談を引き受けながら、多様な事例と遭遇する。この多様な事例の多くは、性の問題に関係している。

実際、私が性教育に関心を持ったきっかけも、養護教諭として、思春期の生徒の相談活動に携わってからである。即ち、小学校勤務から、発達段階の特徴として、性に関する相談が多くなる、中学校への勤務となつてからなのである。当時の経緯を紹介した、次のような筆者についての記事を示す¹⁹⁾。

「自分の意志」重視し性教育 鹿間久美子さん 性を語り合える社会に

「中絶や性感染症に対して自分で判断し、責任が持てる年齢になるまでセックスはしないほうがいい」と前置きしながら、『誘われるまま』『相手まかせ』ではなく、自らの意志で適切な性行動をとることができるように」と性教育の意義を説明する。新津市で生まれ育った。憧れだった看護婦として働き始めて3カ月、仕事に追われる毎日に「人間を物として見てしまうようになるのでは」と不安を感じた。・・・(中略・引用者)・・・「先生、ちょっといい？」放課後の保健室。生徒は悩みを聞いてもらおうと訪れる。「自分の性器は異常なのは」「妊娠してしまったかも」と悩む生徒が多い。「そのほとんどが正しい知識がないばかりに不安を抱いている」新津市内の中学校に勤務していた時に、性教育の必要性を強く感じた。性教育がそれほど大切だと考えられていなかった20年程前のことだ。性教育に取り組み始めたころは、「教えなくとも自然とわかる」「自分たちはうまくやってこられた」という声もあった。が、「いまの子供たちは、アダルトビデオで得た知識をうのみにしてしまうなど、あふれる性情報におぼれている」と過去との違いを強調する。性について学んでこなかった親の世代は「ぜひやってほしい」という声が多い。思春期を迎えた中高生とのコミュニケーションが取りずらく、「踏み込んだ話をしてほしい」と求める。(アンダーラインは引用者)

このように、生徒から持ち込まれる、性に関する不安や悩みの相談活動に携わっていると、結果として、性教育に関心を持たざるを得なくなる。そして、性に関する内容を学ぶうちに、性教育の重要性を認識していくのである。

カーケンダールも「必要に迫られて」性教育に傾倒して行った経緯がある。ガイダンスに取り組む1940年以降、性教育についての研究論文を執筆している。そして、性教育をライフワークとしたのである。カーケンダールが性教育をライフワークとした経緯を、波多野は次のように解説をしている²⁰⁾。

「ガイダンスという領域は、教育学の中でも最も学生・生徒に近い位置にあります。生徒会や課外学生活動の指導、就職の世話、ちょっとした教師と生徒とのいざこざの後始末、家庭の複雑な事情によって生ずる生徒の悩みの解決、・・・(中略・引用者)・・・学校の雰囲気作り、そして、成長期にある青少年のガイダンスで大きな比重を占めるのが、性に関する問題で

す。……(中略・引用者)……ガイダンスの分野の中での必要性から、性教育が彼の前に立ちだかったということができるでしょう。その動機はどうあれ、彼の性教育理論の基礎がこのころまでに作られてきたことも事実です」と述べている。

また、「当時の米国教育学は、いわゆる経験主義教育（Experimentalism）が隆盛の一途をたどり、親や教会の命ずる通りに動く子供を育てるよりも、子どもの身になって問題をいっしょに考えてあげるタイプの教師が理想とされていました。これを問題解決学習と称しますが、多くの教育学者は、授業の場面でこの方法を活用するために努力を払いました。しかし、カーケンダール教授は、個々の子どものもつ日常的な悩みを解決するためにこの教育学を用いた点がユニークです」と、カーケンダールの教育学の思想も紹介している。

3-2 カーケンダールは性をどのように捉えていたか

カーケンダールの初来日時に「現代社会における性の役割」²¹⁾が特別寄稿されている。論文の内容は、第1に「社会の近代化に伴って家族内の人間関係、特に親子の相互的位置関係が変化してきた」、第2に「夫婦間の人間関係や、男女間の位置関係にも大きく及んでいる」とし、ジェンダー論や性に関する情報の開放に関しても言及している。主な主張は表2のようである。

表2 現代社会における性の役割 L.A.カーケンダールの主張（1972,波多野翻訳）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 性の本質は、性意識や性行動に限定して捉えられるべきではなく、幅広い人間関係や行動様式の中に存在する鍵であると考えられる。(2) 個人にとって男性（女性）であることの意義は、性行動が可能な年代においてのみ存在するのではなく、生涯を通じてのものである。さらに、夫婦や恋人同士だけを考える必要はなく、親と子、同性同士、友人同士などの場合にも、これが成立しうるはずである。(3) 人間の性行動は他の対人的行動と同様に、生殖器や一時の衝動によって支配されるのではなく、本人の全人格の現れなのである。(4) 性欲は自然な現象であり、これをもつこと自体が正常人であることの証明になる。(5) 性行動が本人のみにおいて行われる場合（たとえば自慰）には、年齢や性に関わりなく許容されるべきである。(6) 他人との関係において成立する性行動は、当事者間の人格的ふれあいの場である。望むと望まざるとにかかわらず、性行動の当事者たちは相互にきわめて大きな影響を与え合うものであって、これを避けることはできない。(7) 全人格的幸福感をわかちあえない人間関係からは、欲求不満と被害者意識による不安定な生活しか生まれないであろう。(8) 性行動が当事者相互の認識を深めつつ信頼と愛情を確かめ、尊敬と思いやりの具体的行為として行われるならば、相手を傷つけたり一方が苦痛を味わうこともないであろう。これは行為によって相手を互いに高く評価するような、すなわち互いに人格を高めてゆくような行動である。（性交の真の意義は男女の全人的融合にあり、性器相互の結合にとどまらない。したがって身体的（形態的）に多少の差があっても、それを精神的な高まりによって |
|---|

補ってなお、あまりあるであろう。それをささえるのは、日常生活における相互の信頼関係であり、それを抜きにして性行動のみを論ずるのは望ましくない。)

- (9) 愛し合ってさえいれば良いというような画一的な基準ではない。性行動は個人的な問題であって、他人がとやかく言うべき筋合いのものではないが、それだけ本人の意志決定に関する責任の度合いが重いのである。
- (10) 成長の途次において異性や自分自身についてどのような認識をしたか、または認識に至る環境におかれたかが根本的な原因となっている。

このような主張である。また、主張に基づいて、「性の解放の真の意味はフリーセックスでもないし、ウーマンリブやポルノグラフィーの流行でもないはずである。『性とは何か』をより公開的に考えることこそ性の解放につながるのであって、表面的な自由や現象だけを捉えてこれを論ずることは、片手落ちというべきである」²²⁾と説いている。

3-3 カーケンダールの「セクシュアリティ」概念

「セクシュアリティ」の概念は、どのように定義されているか²³⁾。2000 年 5 月 WHO(World Health Organization:世界保健機関)と WAS(World Association for Sexology:世界性科学会)が共同研究としてまとめた「性とセクシュアリティ」の概念は次のようである。

(SEX) Sex refers to the sum of biological characteristics that define the spectrum of humans as females and males

セックスとは、女性または男性としての人間の範囲を区別する、生物学的な特徴の総和である。(生物学的次元にのみ用いられることに意見が一致している)

(GENDER) Gender is the sum cultural values , attitudes, roles, practices , and characteristics based on sex.

ジェンダーとは、生物学的な性を基盤にした、文化的な価値、態度、役割、習慣、性格などの総和である。(社会において存在している、男女の特別な力関係も反映している)

(SEXUALITY) Sexuality refers to a core dimension of being human which includes sex, gender, sexual and gender identity, sexual orientation, eroticism, emotional attachment/love, and reproduction . It is experienced or expressed in thoughts, fantasies, desires, beliefs, attitudes, values, activities, practices, roles, relationships. Sexuality is a result of the interplay of biological, psychological, socio-economic, cultural, ethical and religious/spiritual factors.

セクシュアリティとは、人間としての中核的な特質の 1 つであり、セックス、ジェンダー、セクシュアルならびにジェンダー・アイデンティティ、セクシュアル・

オリエンテーション、エロティシズム、情動上の愛着または愛、および生殖作用を含む。

セクシュアリティは、思考、幻想、欲望、信念、態度、価値、活動、習慣、役割、関係性において経験され表現される。セクシュアリティは、生物学的、心理学的、社会・経済的、文化的、倫理的、宗教的または精神上的の諸要素の相互作用がもたらす結果の1つである。

以上のように、現代の「セクシュアリティ」概念は、「私たちのあり方、感じ方、考え方、行動の内容として表現される」としている。

次に、カーケンダールが示した「セクシュアリティ」の概念を示す。

「セクシュアリティ、すなわち人格と人格との触れ合いのすべてを包含するような幅の広い概念、という言葉で置き替えられるべきである。セクシュアリティでは人間の身体の一部としての性器や性行動のほかに、他人との人間的なつながりや愛情・友情・融和感・思いやり・包容力など、およそ人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある生育環境なども全て含むべきである」と述べている²⁴⁾。このように、「セクシュアリティ」の概念は人間を全人的・包括的に捉えた概念である。

伊藤裕子は、「性の3つの側面」として図1を示し、それぞれの関係性を述べている。

「セックスというのは、一般的には生物学的な性いわゆる性別としての性ということです。

それから、ジェンダーは今日では社会的・文化的な性ということですが、ただ、ジェンダーの理解については、漠然とした形でわかっているけれども、恐らく一人一人は違っているのではないかと思います。……(中略・引用者)……

さらにセクシュアリティは、ジェンダー以上にもっととらえにくい、捉えどころのないものです²⁵⁾として、セックス、ジェンダー、セクシュアリティの関係性について述べている。

一方、池谷壽夫は、セックス・ジェンダー・セクシュアリティとエロスとの関係を、図2のように示している。「セクシュアリティのうち、他者と合しようとする機能部分がエロスだと考えた方がよいのではないだろうか²⁶⁾と述べている。

図1 性の3つの側面 セックス、ジェンダー、セクシュアリティの関係（注25の伊藤論文による）

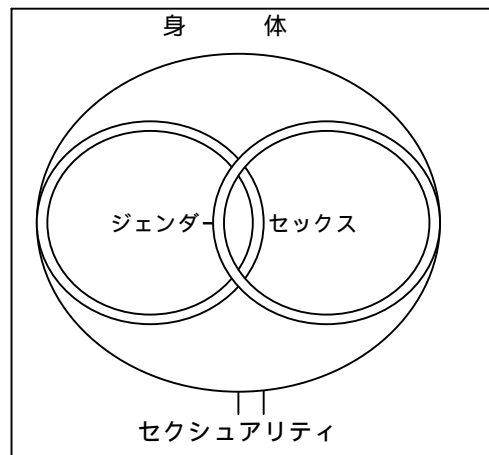
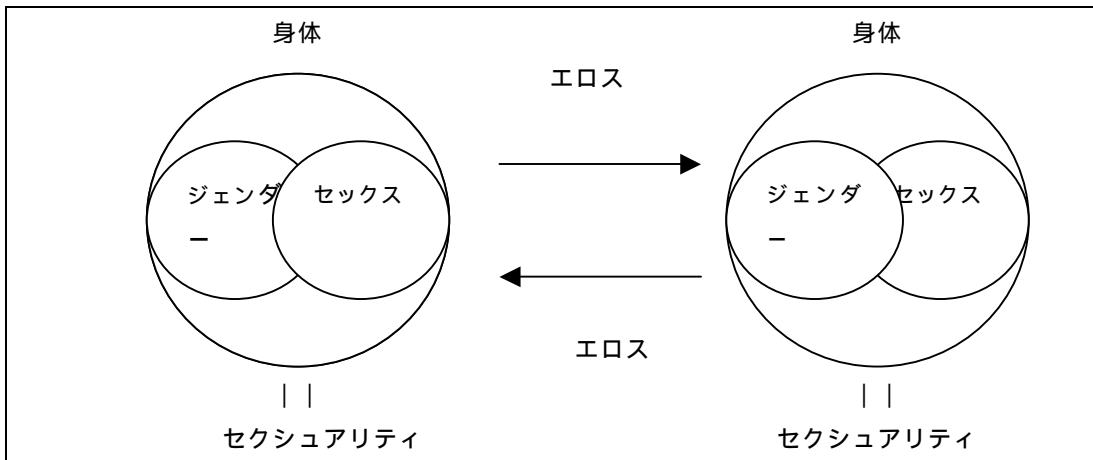


図2 セックス、ジェンダー、セクシュアリティとエロスとの関係（注26の池谷論文による）



次に、池谷は、カーケンダールらが創設した SEICUS (Sexuality Information and Education Council of the United States:全米性情報教育協議会) が、我が国の性教育を前進させた功績を認めている。ただし、「今日フェミニズムの理論的成果が蓄積されている中で「ヒューマン・セクシュアリティ」の理論を見ると、そこには批判的に検討すべき幾つかの問題点がひそんでいるように思われる」²⁷⁾とも述べている。

問題点として、「セクシュアリティ」の概念が、人間関係論に集積しすぎていると指摘している。そして、「人格概念そのものがより精神的にとらえられることによって、セクシュアリティの身体的側面やエロスの側面よりも精神的・道徳的側面がもっぱら強調されることになるからである」²⁸⁾である。

池谷の論述からすれば、心身二元論もしくは多元論的に解釈しているようにも見受けられる。ところが、「身体的・性的・精神的存在として人間そのものであり、その人の生活史の中で形成された『個性』なのである」²⁹⁾とも述べている。この論述からは、カーケンダールの「セクシュアリティ」概念との異質性は感じ取れない。

そこで、カーケンダールの次のような理論を補足する。「人間のパーソナリティ全体に対して、性行動がどんな関係をもっているか」については、「性欲だけを他の全ての人間的欲求から切り離して考えてはいけないという点です。現代の心身相関についての医学的見解がそうであるように、身体各器官はそれぞれ独自に働くわけではなく、身体・精神・外的環境などの全体的相互作用によって機能するのです。ですから当然のことですが、セックスは生殖器官だけ、または肉体的側面のみでの営みではなく、本人を取り巻く世界との関係を含めて、パーソナリティ全体がかかわっているのです」³⁰⁾と論じているのである。

また、池谷が指摘した問題点は、「ジェンダーに縛られたセクシュアリティ」として「彼にとって問題になるのは、せいぜい男女のセクシュアリティの関係の健全な倫理的あり方である。彼のセクシュアリティ論が、先に指摘したように、もっぱら対人関係論になるのはこのため

あろう。実際、このことについて最近カーケンダール自身反省して、『従来、我々は性行動の姿を、常に男と女が互いにパートナーとなって、という組み合わせだけに限定して、かたくなにこだわってきたように思われる』と告白している³¹⁾という（アンダーラインは筆者）。

確かに、学生運動やウーマンリブ運動も起きていない、1960年代前半の理論から、20年以上も後「社会事象の変動による言説への影響」はまったくないとは言えないのかもしれない。

しかし、「社会事象の変動による言説への影響」はなかったと考えられる次のような内容がある。1972年に記された波多野の論文によると、「カーケンダールの主張するセクシュアリティの概念では、人間同士の相互関係全てがセクシュアリティの発露であり、これは男性 女性の組み合わせに止まらず、男 男、女 女の組み合わせ、更にあらゆる年齢層の対人的組み合わせにもセクシュアリティが含まれているとしている」³²⁾

また、池谷が引用した論文（上記アンダーラインで示した）の中で、カーケンダールは次のように述べている。「男女の性役割の未来について考えてみることにする。女性に対する性差別撤廃を主張するウーマンリブ運動は世界的な拡がりを見せているが、その裏返しとしてのマンリブ運動がそろそろ散見されていることから、今後はこの傾向が更に高まると予測されるのである。しかし女性が女性の権利を主張し、男性が男性をと言うことであるならば、人間を尊重すべきヒューマンリブ運動になっていくのも一つの方向だと思われる」³³⁾という考え方に注目する必要がある。

カーケンダールは、1937年の研究活動の初期から、「平和主義者の思想形成の過程」などを著している。また、1941年「全米ヒューマニスト協会」の創立時からのメンバーであり、後に同協会の理事長となっている。性教育をライフワークとする時期より早く、ヒューマニズムの思想に傾倒していたことが伺える。

カーケンダールの持つ「ヒューマニスト」としての側面や思想を理解しなければ、彼の「セクシュアリティ」概念を論ずることはできないのである。

カーケンダールの「セクシュアリティ」概念をはじめ、彼の基本思想はヒューマニズムに支えられている。ヒューマニズムの思想について、カーケンダールは次のように述べている³⁴⁾。

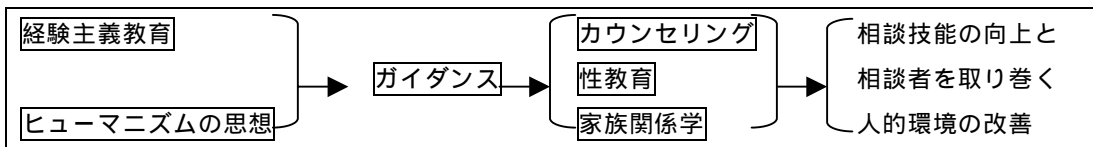
「ヒューマニズムでは、人を哲学的・生物学的・心理学的・社会学的に捉えるが、しかもその中のどれか一つのみを取り出して、人間を論ずることはしない。何故なら人間は常に総合的な存在であり、そのどの一面も他の分野との相関なしには成立し得ないからである。・・・（中略・引用者）・・・「新しい性の革命」を考える時に、これを性に関わる身体的な状態や意識・行動についての革命であると考えてはならない。総合的な人間把握と、人間性に全幅の信頼と責任を置いた理解を作り上げることが、即ち革命であり、その観点から性的問題を考えようとする取り組みこそが「新しい革命」に連なるのである。これこそが、セクシュアリティの真髄であり、それなしに性行動の革命や変化について論ずることは我々の範疇外のことである。」³⁵⁾

4 結果とまとめ

カーケンダールは、我が国における性教育思想に、強く影響を与えた人物の1人であった。カーケンダールが性教育の思想を構築した経緯を、図3で表した。また履歴からは、第1に「経験主義教育」による、問題解決学習をガイダンスの分野に応用した活動をおこなっている。第2に、ヒューマンズムの思想に裏付けられた、「青少年共感型」の相談活動に徹している。ということがわかった。

カーケンダールは、この2つの基本となる思想を基に、学生のガイダンスに携わり続けた。ガイダンスをおこないながら、(1)自己のカウンセリング技能を磨く、(2)相談内容として多くを占める、性に関する相談についての対応から、性教育の必要性を認識する (3)家族など相談者を取り巻く人的環境の改善を図る、という実践研究に没頭している。そして、長期間にわたる詳細な個人調査のデータを蓄積し、次のような主要著書を著した。1950年「人間関係としての性教育」および、1961年「婚前性交と対人相互関係」である。

図3 カーケンダールの性教育思想構築の経緯（筆者作成）



以上のような経緯から、カーケンダールは「性の本質」を次のように捉えていた。

- ・セクシュアリティの本質は、幅広い人間関係や行動様式の中に存在する
- ・セクシュアリティは、生涯を通じて存在する
- ・性行動...・個人的事象...・性欲は自然な現象であり、本人の全人格の表れである
 - ・対人的事象...・当事者間の人格的ふれあいの場である（なお、性交の真の意義は相互の全人的融合である）

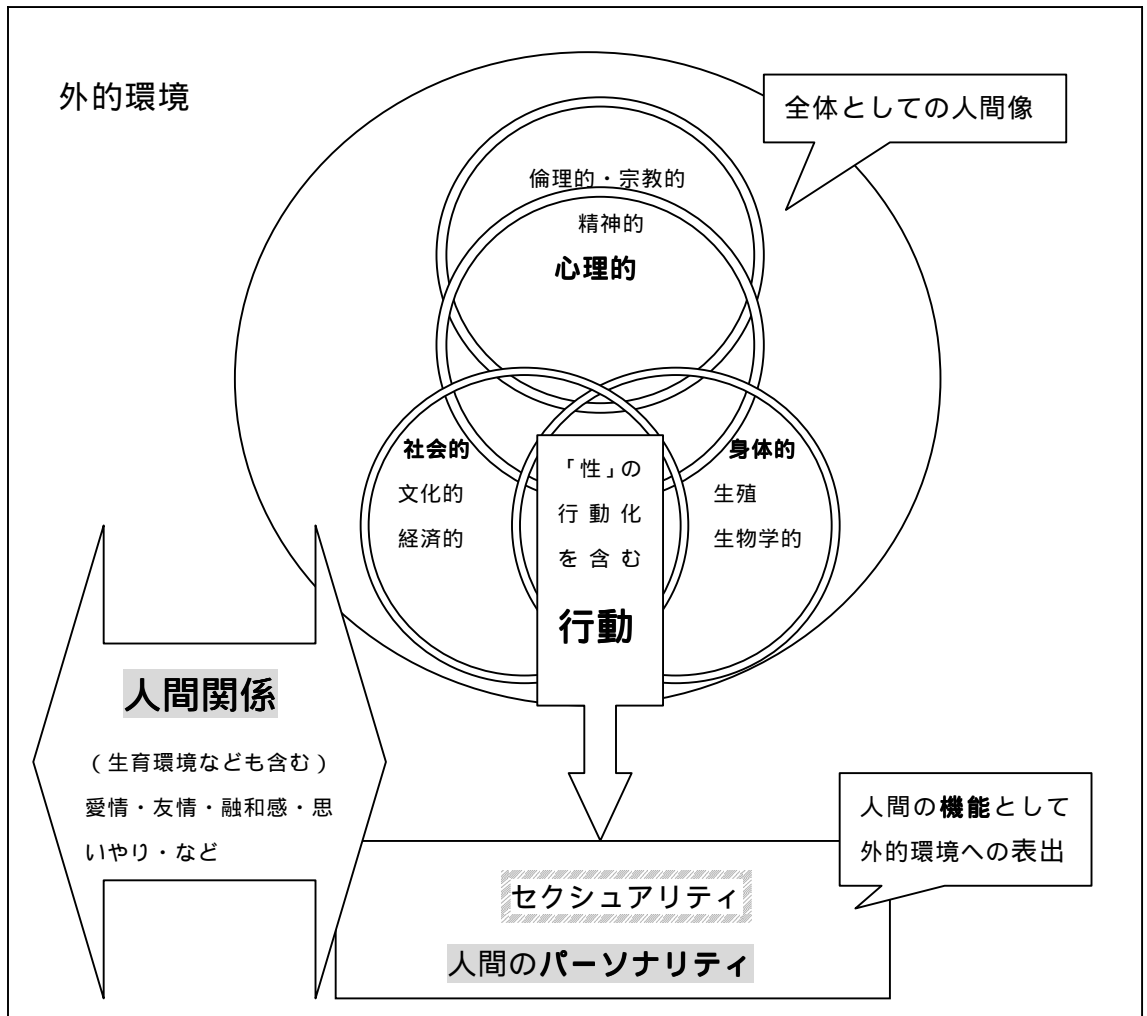
なお、上記で引用した論文の「現代社会における性の役割」では、「性」として表記されている用語を「セクシュアリティ」と解釈し、「性」と「セクシュアリティ」の用語の使い方を明確にした。（アンダーラインの部分）

以上の理論的背景から定義された、「セクシュアリティ」概念は、人間を全人的・包括的に捉えた概念として示されていた。

現在、セクシュアリティについては、WHO/WAS や SEICUS など、組織や団体における定義がある。また、多くの研究者により概念が示されている。例えば、本論文で引用した図1・図2の「セクシュアリティ」のような概念である。ただし、図1・2では「セックス、ジェンダー、セクシュアリティの関係」で、上部の空間に「身体」が位置している意味が明確に述べられてはいなかった。

私は、「行動として外部に表出される、働きや作用（思考や認識）」が、「セクシュアリティ」であると考えた。即ち「セクシュアリティ」は、「機能」として外的環境へ表出される現象である、と考えたのである。そこで、カーケンダールの「セクシュアリティ」概念に基づき、2000年に世界的に合意が得られた、WHO/WASの「セクシュアリティ」概念を補足することにより、心身相関に基づいた「セクシュアリティ」の概念の構造を、図4のように図式化することを試みた。

図4 心身相関に基づいた「セクシュアリティ」概念の構造（筆者作成）



なお、カーケンダールが、「人間のパーソナリティー全体に対して、性行動がどんな関係をもっているか」については、「性欲だけを他の全ての人間的欲求から切り離して考えてはいけない

という点です。現代の心身相関についての医学的見解がそうであるように、身体各器官はそれぞれ独自に働くわけではなく、身体・精神・外的環境などの全体的相互作用によって機能するのです。ですから当然のことですが、セックスは生殖器官だけ、または肉体的側面のみのものでなく、本人を取り巻く世界との関係を含めて、パーソナリティー全体がかかっているのです」と論じている点を重視したのである。

以上のように、カーケンダールの履歴をたどり、性教育思想を概観した。カーケンダールに関しては、我が国における参考文献が非常に少なく、未だ履歴の検討は不十分である。また、図4で心身相関に基づいた「セクシュアリティ」概念の構造の図式化を試みた。図式については、今後も理論的な検証を積み重ね、細部にわたる概念の検討をおこない、改善を続けていく予定である。

本論文では、「セクシュアリティ」の概念を中心に論じたため、「性教育思想」に関して詳しい論述がなされなかった。また、カーケンダールが、ガイダンスに傾倒していた時代と、性教育に本格的に取り組んでいた時代との思想的变化があるものと予測されたが、論述までには至らなかった。別稿により、さらに詳しくカーケンダールの「性教育思想」について論じる予定である。

< 註 >

- 1) 市川須美子ら編集：教育小六法・平成16年版（学陽書房、1950年初版、2004年16年版）49頁。
- 2) 財団法人日本性教育協会：1972、「性教育研究」・季刊創刊号、財団法人日本性教育協会編集、小学館、3頁。財団法人日本性教育協会は、理事長（内田常雄前厚生大臣）常務理事（朝山新一・林四郎・村松博雄）をはじめ、当時の性教育に関する研究の第一人者、厚生省・文部省の大臣歴任者や出版社、教育委員会および学校関係者で構成された団体である。
- 3) 朝山新一：1908 - 1978、大阪市立大学理学部教授（生物学）わが国の代表的性科学者として、財団法人日本性教育協会設立の中心となった。
- 4) L.A.カーケンダール著、波多野義郎訳：1980、「人間関係学からみた性教育の課題」『現代性教育研究』季刊42号、財団法人日本性教育協会、小学館、8頁。
- 5) L.A.カーケンダール著、波多野義郎訳：1985、「人間の性 = 過去・現在・未来」『現代性教育研究月報』VOL.3、NO.12、1頁。
- 6) 鹿間久美子：2005、「『性の健康教育』における高校生の成長過程の研究 我が国『性教育』の経緯と学習支援者としての養護教諭の機能」、現代社会文化研究32号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、130 - 131頁。
- 7) <http://search.yahoo.co.jp/>, 2005.9.15. 性教育関連では田能村の引用他合計3件、ジェンダー論では上野の引用他合計2件。
- 8) 波多野義郎・黒田芳夫：1972、「L.A.カーケンダールの性教育論」、東京学芸大学紀要第5部門芸術・体育第24集、164 - 176頁。著者の波多野は、直接の師弟関係ではないが、波多野のオレゴン大学大学院留学時に直接の指導教授からカーケンダールの話を聞いていたという。波多野が帰国した後カーケンダールから連絡があり、初来日時の通訳として務めた。以降カーケンダールとの親交を深め、来日時は常に通訳をし、彼の学問を学び続ける。我が国で唯一のカーケンダールの著書の翻訳者である。
- 9) レスター A.カーケンダール著、波多野義郎・黒田芳夫訳：1975、『愛の理解 家族関係の性教育』、ぎょうせい。訳者である黒田の「読者のために」によれば、この著書はカーケンダールが記した論文などを7編選んで編集されている。内容は「家族の皆で読むことのできる性読本と考えていただきたい」「全米性教育協会の教育計画にも、これが基本方針として採用されています」とある。
- 10) 波多野・黒田：1972、前掲書。

レスターA.カーケンダールの性教育思想の研究（鹿間）

- 11) カーケンダール著、波多野訳：1985、前掲書。
- 12) The Humanist of the Year Book 1953 - 1991:Historic Humanist Series ,Lester Allen Kirkendall,1983 Humanist of the Year , <http://www.humanistsofusah.orb/humanists/lester-allen-kirkendall.htm>, 2005.9
- 13) Human Sexuality : An Encyclopedia:1994,Vern L. Bullough All rights reserved, GARLAND PUBLISHING .INC <http://www2.rz.hu-berlin.de/sexology/GESUND/ARCHIV/SEN/CH15.HTM>,2005.9
- 14) L.A.カーケンダール著、波多野義郎訳：1972、「現代社会における性の役割」,「性教育研究」・季刊創刊号、財団法人日本性教育協会編集、小学館、123 - 137 頁。
- 15) 財団法人日本性教育協会:2001、「戦後日本の性教育史と財団法人日本性教育協会 30 年史、CD-ROM 版
- 16) 井上輝子・江原由美子編著：1999、女性のデータブック（第3版） 有斐閣。
- 17) 石川弘義：1974、「性」ふおるく叢書 2、弘文堂、132 頁、石川は、Bigelow についてはバイジェローとして紹介をしているが、大正 12 年に『ビゲロウの性教育』として日本で訳出されている（利光倫訳）とも示している。
- 18) Kirkendall Lester A.:1937,Factors Related to the Changes in School Adjustment of High School Pupils ,Teachers College ,Columbia University.
- 19) 『毎日新聞』新潟版 2001.11.1 「21 世紀 新潟の 100 人」,（牧野哲士）
- 20) カーケンダール著、波多野・黒田：1975、前掲書、「解題」, 328 - 329 頁。
- 21) カーケンダール著、波多野訳：1972、前掲書、127 - 132 頁。
- 22) 同書、132 頁。
- 23) WHO・PAHO/WAS：2000、Promotion of Sexual Health, file://A:\Humboldt-Universitat%20zu%20Berlin.htm 2005.9。原文で確認しながら、「セクシュアル・ヘルスの推進」,（松本清一、財団法人日本性教育協会）を参考とした。
- 24) カーケンダール著、波多野訳：1972、前掲書、133 頁。
- 25) 伊藤裕子：2002、「ジェンダーとセクシュアリティ」,『セクシュアリティと心理学の最前線』,財団法人日本性教育協会、31 - 32 頁。
- 26) 池谷壽夫：1993 第 1 版、2003 新装版、『セクシュアリティと性教育』,青木書店、22 - 23 頁。
- 27) 同書、207 頁。
- 28) 同書、208 頁。
- 29) 同書、208 頁。
- 30) カーケンダール著、波多野・黒田訳：1975、前掲書、「現代社会と性」, 309 - 310 頁。
- 31) 池谷：1993 第 1 版、2003 新装版、前掲書。
- 32) 波多野・黒田：1972、前掲書、168 頁。
- 33) カーケンダール著、波多野訳：1985、前掲書、2 頁。
- 34) 波多野・黒田：1972、前掲書、172 頁。
- 35) Kirkendall Lester A. ed：1971,The New Sexual Revolution ,Donald Brown,（波多野・黒田：1972、前掲書 172 頁。）

主指導教員（齋藤勉教授） 副指導教員（井上正志教授・柴山直教授）